

職人歌合上

特279-206



1200501132100

特279

:06

0|1|2|3|4|5|6|7|8|9|30|1|2|3|4|5

始





あれれ死き川の湖もけふ
漁り現とてのまゝわと風と
うはえとくとくとくとくとく
の宿すよとくとくとくとくとく
とのふとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとく
新と新と新と新と新と新と
にちゆかにちゆかにちゆかに

かうこたまをもひうがく、おれぐ
のあは、すくこのわきとすみか
とすこゑてたまきりつひくと
おひちをは思ひ自らうむひてあま
うひをすむまよ端量せよとまよ
あまよもゆけあまけやむこと
あまえ思ひいふ舟のいあま你

さんをいきあむ難ばほのうや
あしやあぬとす、むすふとす。
君にさう山の井のあさきんとう
やくすくわくすいだまわさふ
あん文化九年の夏五月中の事

伊流のまこと 猪原泰周

ぬく月をあわすもあつたかせす。これにてねむる程せん方
なうすまへされば萬國川乃うと風を。林東よりと
發るゝ風はさよやとおはすとおもひきを。起ふ。
月をぞ立ちです。あ國柳柳柳がとたうて向ま
まこと往來の人であつみをして。行路のあらむ立へど
て。まほ風まちとんます。がむかくあ。水がくへむと
ちよへざまくまづりなれど。しゆべとふるべ。お乃
産たまふえもくま地じ。月乃人所やあまくせ。何
あまくせ。うて。うて。うて。何よりお河りて。うと
おまくよ。うと。うと。うと。うと。うと。うと。

まよでよとせひのび教くのくは通教もわいのりん
うきよをうじゆくもとがはまゆかまのちあひ
ゆくあくせきのうてくらぬか月小もとてあり
うじとくもくを教もくへ佛乃ま人の枝あるうりえ
なりうるむべきひざくにまうねふみ
きくにそのまくひきあひ小もとてありえ
なもくんせまうさもとくもとくもとくは御殿
まつひくがあつあねずどとおがれまうすらぎく
かうがし。あうてをくまくうどまひひきり。かま行
まくはまくへ青よ

あらわはまくとくと。何へぬとぬへてまくをよ
なれがくとくかくいとくかく。すのあままくへか
一席ぬあう。ふきをあま那ま。さきか。はめ誠と
ひぬく。がく。まく。がく。まく。まく。がく。まく。
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
風ぬかと清。うよかをやりて月うるくきり。あがき
二ツうち。うよか。あよか。あよか。あよか。
あよか。うちのまく。うよか。うよか。春夏秋冬一そ
嘉乃まよ。うよか。虫の声。木葉。もれ葉。もれ折。

あれをあそへきぬかとなんまいもあはせ
あちこちをまわらんせめ下がりむらくちと見ゆ.
街の様よひつて見るも月と見ゆ
あてようほの向むれをめぐらすやうがやあれやも
そやも風とくまくまくまおも方とまばうづふふ
ひめくわのおりまくらぐのゆきまくらがんたひの
まきまくまきとめぐらすやいでやのこの月もふ
ひめくわのめぐらすやいでやのこの月もふ
すかとくよりおきよひとおどりひつ、佛乃
は承る事。佛わざうすをとくとねり給へ

うきとあまは出来でまといふ。かくあるとまじゆ
のふちとまともあるくちつたうてとくに相違の
うきつひがくべ、とまゆういとんとおもかがくと行
きまくらがくとまゆうき故のうきまくらとあててもく
まきまくらがくとおもかがくとまゆうきまくらがくとま
ひゆうはづるなりべし。おもかがくはねりうまでまくら
うきまくらとお算もひつとくくは月と高れ
とまゆうはりまくらがくとおもかがくとまゆうき
うきまくらがくとおもかがくとまゆうきまくらがくとま
あくりよぬとけむるもくすのもくすもくすもく

廻るお詫タツシ紫のちまうすやくこかくらへ
多きがぞくみのゆふれあつまくとくとむとむる
宿すし巣のたより。まつわ行くわざひむるたゞ
やうふあじふをくさゆなきさん今ハムシナ一夫一萬
はく。うづてあづゆと下さよひあまちうづく
支も打す。またああ。放すんべくつあやまく人情
といふねくまやくいへとと風すまかみのあうれ
あれも持ぐ。ばくと月とあとの二を題すとまくへと
ひふ。まづうとりくはよもゑむうとうひくあく
なだれづ。あそをくと月をねむる那よ。

於那うたひとくとくとて、す食くといぬれば
名主様をまき判若あき。難殊せどもとくす食ふよう
か。新事うね。と難殊せんまよ。やあくまかくま。
よ。難ふはまほのう。やー、まだ大事をとがくや
まよ。難ふはまほのう。やー、まだ大事をとがくや
まよ。難ふはまほのう。やー、まだ大事をとがくや
まよ。小十二歳の私合あつまく。とくはやう小職人くわくは
まよ。津多月恵あ来こむひよ。まよ。あづ月恵のすよ。
かく。古き例ようがく。まよ。あづ月恵のすよ。

あのぬま、いざりありとくても、おちやんほ
あくま、よもおきもす。うどいはのちよ、かすみをす。
ふもひへほくづむむかく、まく先あくそ。

一番
た名主



右 大屋



つづり印を多量を作りて、古事記と不月を丁そぎ
ちまきりのう。おまかれて、よもよもとすまけす。月乾
左左吉と判え。すら限の海に乃とまを志
まん更頗復怠らず。判者於職がちやま
事をいよいよ先づる。されば、うりとや難ひど
下のうるども不なまはあらば。左ハ魚幸
神へゆき死世を作り。すと事やりて仕べ。
そも詫食いたの。一あ多くハ得ゆるはや。され
た製り。小親王大長萬まこと。とすゆゑ。人と
如房をも化名す。一あ乃處よす。傷あれ。判者

まひづりうちあらえへこひかくお裏ハナのほ
ゆす。東方の勝と宣べまへとああ耶くよさる
哥のまけはん。桜エリ。春日山若例
准。て勝のま、残ゆられすんや。
いふれんおまえらうおもじすがきり下はせまへを
あつ。よねとひきすむおさく。とつてたあこ、おどろぬ
たて又争ひ。利。右上の勺大屋の三毛アリ
トトロまくはまよ。お宿。

二番
た 僧者



右 医者

江ノ島人書



伊豆みよ天の内徳、れちんを靈ふ昧の秋八月、うき
久しとお月ねうれ枝よりや木草のあす汗とうり質
ゆうれぬらくト事、穢人のぬきもやゑよん。
左あき章也も判たず虚靈ふ昧也。うやう生
なまこを姫侍るもくへれど、一首乃婆あらわ
くねほくす。左丹の桂を桂枝ゆゑま
あれやうきゆげー。猪籠ー。

我ひひの東坡をまゆふすは(せうとく)ふみえぬくすは
なうやう神うちもやめ事もあらむと。唐蘿の蔡子
左方やうえがつとくふ宋をともれも。假ぬまぐり。又

我ひいにゆかうよまむねのト一れけり。左方書る。
判えたのうち難。さつとし小安とよもれる。假名
が今とよもが小安うづれもいぢ。近來は作者の職。
ゆうかと穿鑿して皇國の事。何よし。あはる
のこり。あての折り。せや。い筋。ハサの事。ハ
ゆうか取べてや。を。海田子達。そり書きと見付。ハ
假名よ。かーとも。づじへくも。のト。え。元付。ハ
書て。せうの人の化り。つ。どう。人。ハ。承えて。見
付。ハ。海。よ。も。思。う。り。ゆ。か。う。お。ハ。雲。御。秋。ハ
あ。風。よ。と。う。い。ま。ま。ま。の。心。よ。あ。も。と。う。き。上。の。こ。あ。で
とか。ぬ。行。き。す。乃。是。そ。行。く。り。ふ。酒。と。ふ。さ。事。ハ
あ。み。ぬ。ね。よ。本。あ。う。ね。す。の。例。よ。あ。ま。は。酒。手。引。か。
ゆ。ひ。あ。ん。き。ほ。よ。ち。か。く。割。一。と。も。も。事。と。摺。る
か。れ。典。一。い。う。ま。か。す。舟。共。多。多。送。ふ。乞。と。み。く。酒。行
禁。鳥。を。忌。る。べき。ぐ。て。ゆ。け。は。難。ハ。ま。ね。食。を。た。
さ。う。と。も。か。い。よ。酒。じ。ぎ。よ。信。付。も。今。時。の。様。が。の。す。
大。ハ。酒。漫。の。ま。ア。ト。う。付。ま。ど。酒。ひ。は。す。ペ。シ。系。残。
ち。古。ま。い。あ。う。つ。え。て。ハ。ま。ま。あ。け。そ。は。う。め。や。
た。の。し。つ。ハ。既。以。先。調。お。の。手。す。お。様。不。あ。候。
あ。れ。ば。お。ど。く。へ。く。ね。う。と。よ。や。

三
卦
見
卜
筮



右人相見



山の端ふるむびくく雲うる等あそび離中斷うらきく月新
月をみて今まうかづひ天・庭の黒・氣成へとすくひあると、
右ふ難や・た申え天・庭が思ふ事うとひとくわざ
もとむよせりてへあ何う事あらべ・月がまぶ
何ちあすゆうぶらんふ審判え天のまこと・室乃
くすとおもむきうべりれぐらゆゑあしたる傷。
下ま等そ不、おさとわねておあきらめはまじらひ
ひまでもおとぬいのうめがみのあべて眼鏡まくふうあ
左又ふ難や・た方ヤ云・おのづこ・歎感公判え
た方お・おまよすうお・愁る方人ヤ・状既首優劣

判ちし候まき・以右あすが。

四
左以ちこ



太
鯱人



かのむすめのうゑにまもすとて旅より行難ま背教
萬^{アマ}ノ十五夜よりト一月行ひしきのあまうる月を
左方の威素方方ナミ萬日ハ十五夜ナリと
侍よ。も藏ふうりてどをなぐや。右隊アミ。左ノヘモ
萬日。おみき。女三夜得大勢至菩薩もとやく。
當日の佛神をうをまく。水行のあまうけ茶。
判えたの致。底をくへ。いこみやう。す本
寺は毎日初めより。ニのウがまく。すへ
うつまく。月。うびのすもを。おきりを。うたど。ひ
しまくは。まことひ。ものあまうる月。

右頬人



引ひて、ぬせのねのありぬで、よるや梓のうね
あ^ア日本^ニもたむねあす。水のひがみのあゆう月新
左左^{シシ}あら難^{シキ}や。刺^スえたちやといへ洞^ハ、ちあつ^シす。
とく車^カあると、賊^ヒうよひうらうの旅^ト。
よまれするあるべ。日^ヒ坂^{ハシ}巨^{ヒラ}難^{シキ}、鶴^{ハク}邊^{ヘン}卑^ヒ倍^ハ。
上の文字^{シテ}も、代^シといふも、さくへあお
なまくまうすと、廢^リするものと、あそ^ハみのひへまぬ
奥^{ハシ}の危^シけ下^ト、わざてあらまや^{ミツ}す。牛の角^ハ
左左^{シシ}あら難^{シキ}や。刺^スえ左^{シシ}りう^シす。左左^{シシ}あら
よまれ^シす。

五

た書^シ物^{モノ}賣^メ



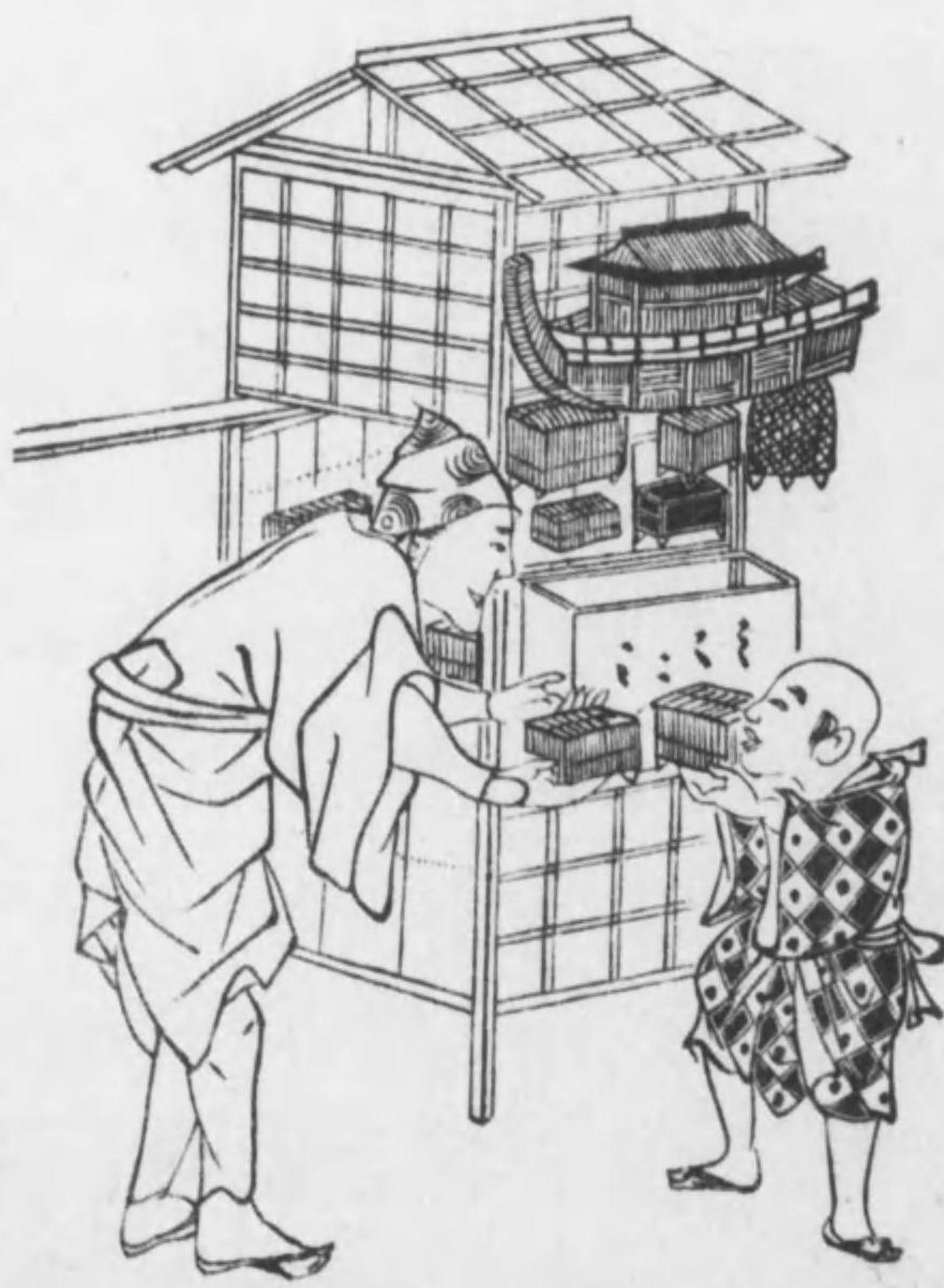
右魚賣



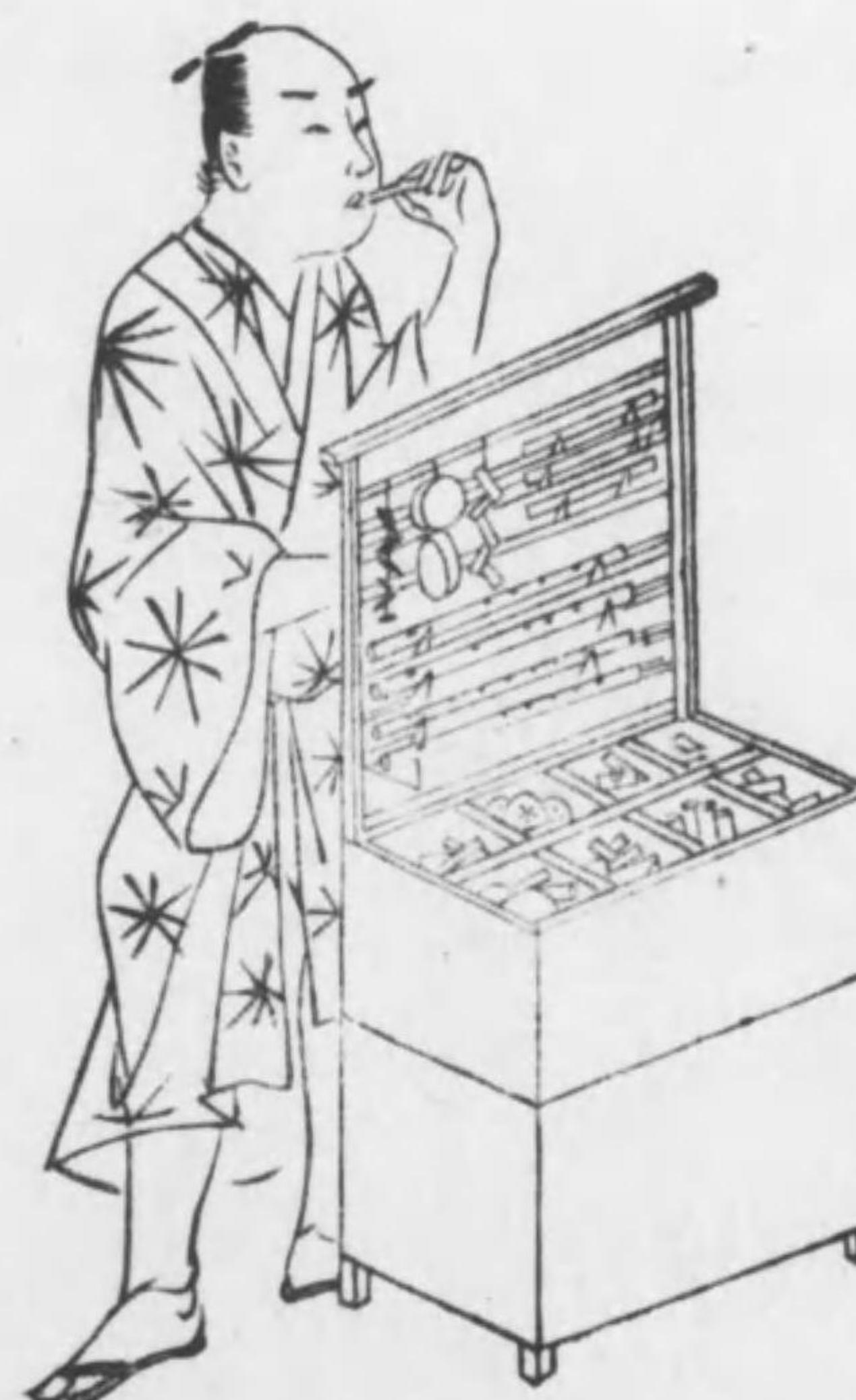
名まきる紫月乃ともひもで豆ひまやとそうす鮎ま鮎新
山のまくらぬき月をししてのいをまみねまきりま
たおも事と判云たの秋翁もうくはべ
あまで世上は八月、残半生もる月とひまくに
けよや豆をくじよまくさむまくさすや
ちも月をじ情ぬうとけます。す。務
事無く何首鳥自然著頃數行まと我ふかがまえ
配うりねどもまき岸あらびくと前掛ひよ
かやもあ。たやえ。向うもととく。向。誠母
向うもあくや。判云あらびくとまくと。詞と代

かあくよまぬるよはしやばんの神小ど主て。お
ひそくひひ下されりけりうと。ゆうぞ打せめ
ほほめきて。ハ佑きどもタゞ。ふやうりく。花と
の婦よ。大切に。自ら多喜。行首鳥の。はは。
な木下。お轍をん。味。あまで。ハ佑き。

六番
た虫賣



右 菊賣



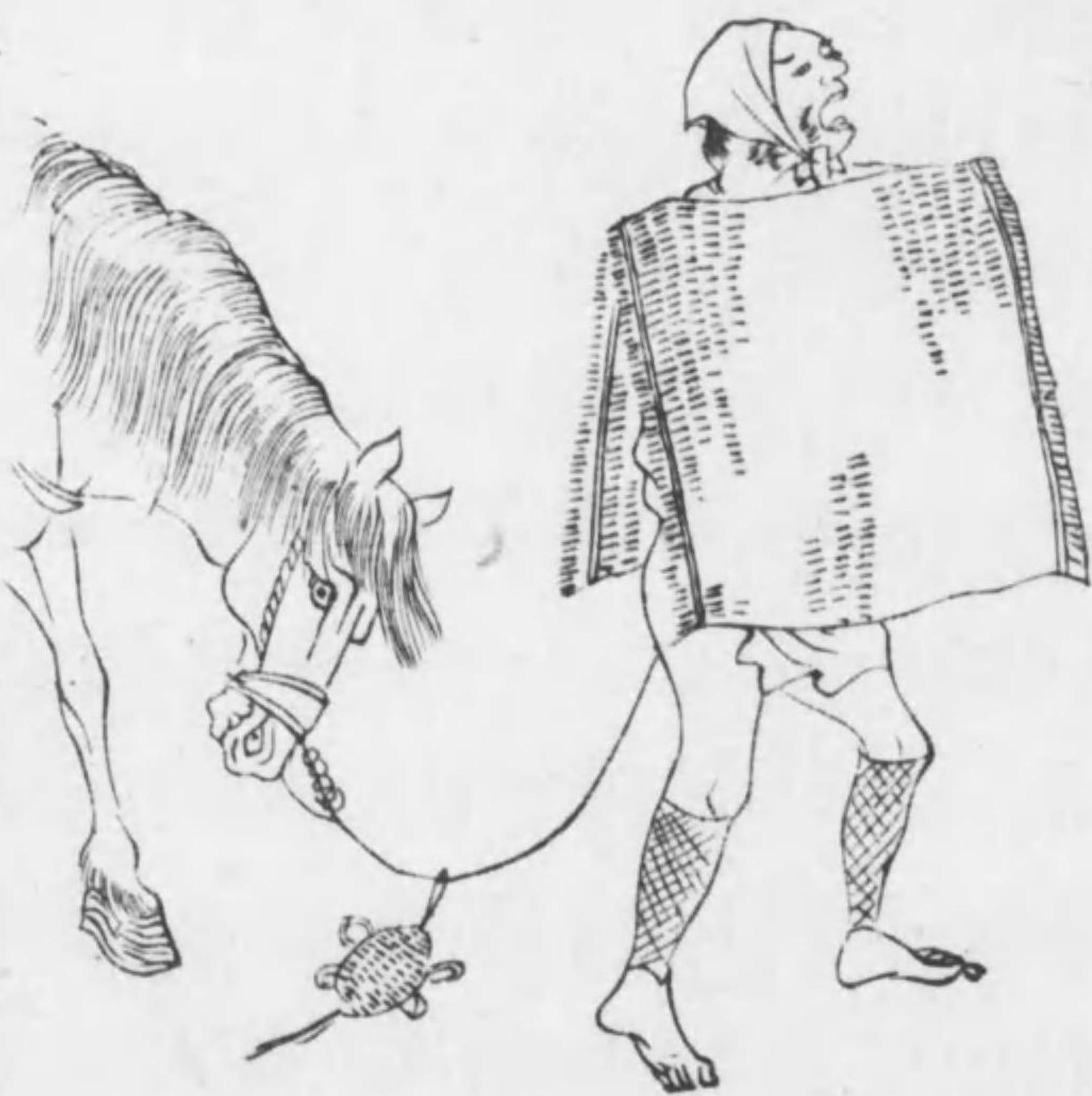
秋の暮れ河童と月とねむじまば荷へる虫がちよどきとも
ぬえ竹乃する。また秋もあれどねみ。うれとあひりぬは
大方頗る感事たや云。又、萬と世経。下
二三と少く似ます。判云。下り本物より、もう一六音
番の詠合候。頭照大方そ。旅館も多めり候。を
りやねとす。大方難。一々と詠歌乃て考
え難さ。なべやうつは詠歌もとひく。上も下も
辛う。おもか。那優。おもか。おもか。おもか。おもか。
うおもか。おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。
おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。おもか。

御をも諒するべ事とあらず。悔事とましく
誠すやはれ。諒するべ事とましく、かく事とましくべ事。
事とましく、せばやうなりとまく。ちり、尊ひ也。
さやつは尊ひ。殿上人をも。と那が寫志神
乃初々がく。かく。短使などとまく。
御宣よりて、耳とまちく。事とまく。なまやう
しすべきれど、もの内見と非設する制事べ。うる
お意想へうげ。小草の月とまじき。うる葉よ。
いづみうれし。まわとのう。まほ道。まく
かく。うれし。まわとく。かく。うれし。

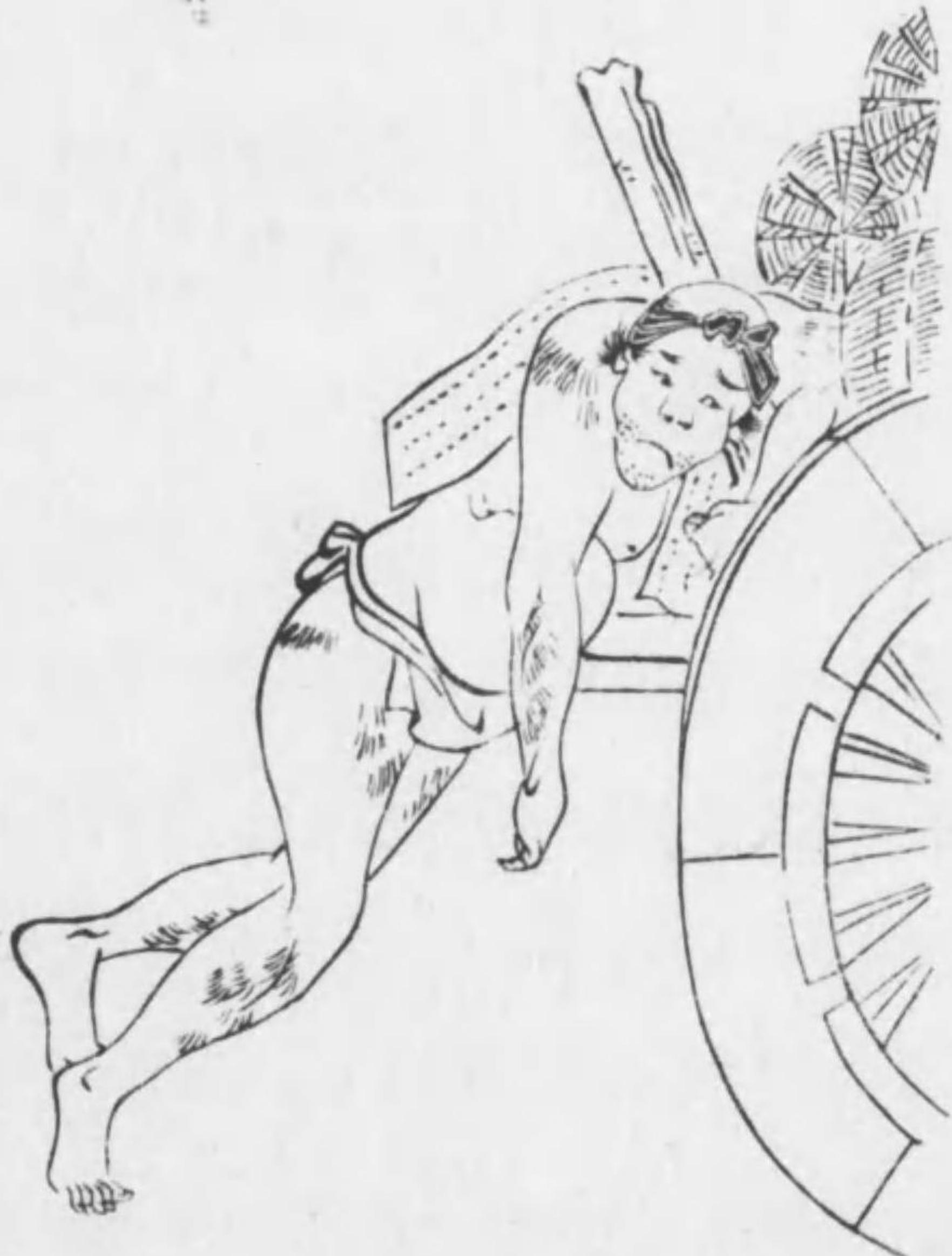
まく。御禁が馬とまく。雲乃とだかまく。とまく
はう。まく。け。とまく。とまく。とまく。
伊とまく。は。とまく。とまく。とまく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。

ねえ井 おもす おれのよひと日とゆきが下りるまのむく
たゞ云ひ残すは思とすもしの間つも侵め
おやたゆもひだりよゑよ日をとよとよくてゑ
てせはる。判ふかず、ぬけぬ蝶草といふ物の
音きばやひきのとと聲を残れとも先に
いの、かすれぬがくつかまざる森。もあ
思ふひととた方難うたれ二のうそ姑み
ま秋つてうらう勿論。難うたる苦諒。や
た方のよゑぬよとひまとふさうむけらす。
おやうちゆみ音

七番
左馬方



右車引



田舎のへきられの綱のあぶくも月よひも免
書て引松木車を。三月のうや上苑ある蘿井
右やえだすを梅郎た申えらぬを感公。
判え左のよもよも聲て、ちを傍と申。
くは生まあれ乃弱と御まへせく津を、我つも引出
角木つもちの車をそれもながれどもそ重荷なり
左左又ふ難ヤ。判えた左もよせ旅ある哥
玉竹の中よ。毛草とらし車よ七車と。仲
古とよくひ叶へ草を西侍郎。つな引
せんるよりたらま車せぬか。近侍。

八事
龙昇服屋



右手三矢



植田鷦那肉鷦那肉もくまもくらうる株の葉ノ月
土手よまき柳の一葉うちとそぞてこなが枝ると月ぞりう
たあちや、藏ふじは判云。左植田鷦那肉鷦那
色のゆきふきり、まれる景氣限都。左柳茶
竹あがつるより初秋の月のうりありん。而後
あくたたゞとふす御月をよせても、右も留
あけまく。おまくとからくともよじかね。たハ
角あくまゆき柳の夜月頗平様。左鷦々
河へおれきうら皮。おまがあふるあらあらとおま
浦つ身づきて月日とす。洽うりりと何ものさん
人をぬよまゆ。たあ猪

右云。左す何とやんともぬやす。たす。
ゆうりまく小俗あら。判云。左すれどくの
床くくりよべりきと。同もくら。左す。初夕
うすくらむ。ほす食の事。うすくらむ。左す。
何をとひきんか。うすくらむ。左の夜具
人をぬよまゆ。たあ猪

九
九
左
女
郎



太
藏
者



切立れ花の盛ち事よりまくわん様揚げまく様のよも
秋風よ吹きまかんよもの音が風よ速ひくもくもく
左方章よ判えたまふれの風情とづくれる。
吉永は金盛あらぬものか。右月よ速のうふ
ほ雲。奥つきてあら左をゆ務

いふせん高ゆくもむきむきむきむきむきむきむき
三猿乃ゆくもれあぐる批言ふくふく我ぞも那
あやみふく身難いいうせんとももとより人皆
いや。左章よ判えべくさんざり歸詞。方を
かうじもがやまと果たばらう何うそづゆまと

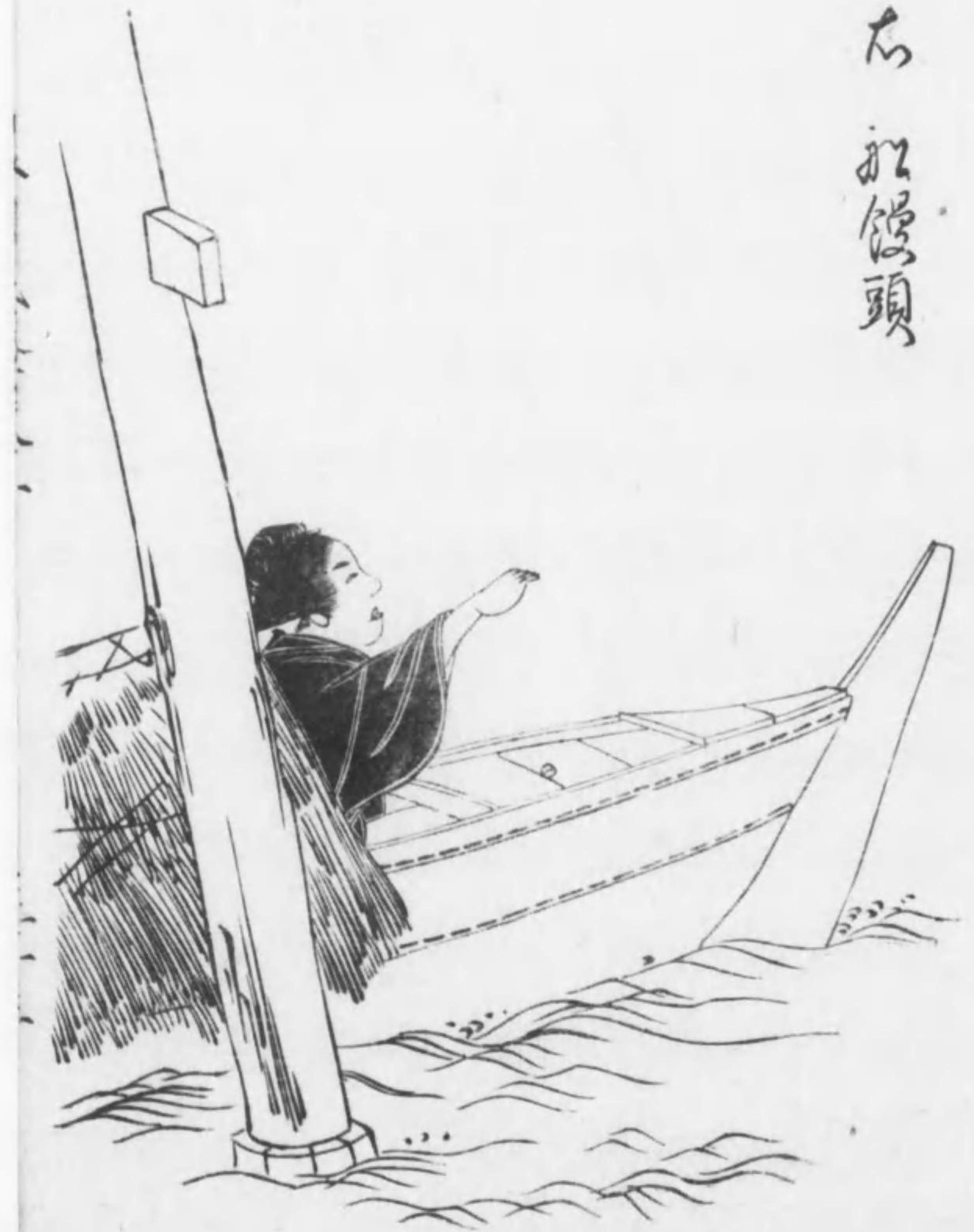
初々よもあらすまうちの事アリナラスモヨクハ
いふせんといぬ身が以優あよ耳をきはる
ゆゑやけしげどうてつねの詞をきく。
あちだくふく夢するよんといはれ。よも
よもあへよ。一わどもひ拂ひよもひよも
せきよあよ。作者はほら身を事よ行の詞を
よかにり。もたらす執着よもよも。よも
よも。残りうたふ物の付ふせよもよも
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。

十番

吉良・鶴



右
御頭



晴る朝ハ護持院原村土まである森の原より月が昇る
月をかの奥から神堂とといふが古跡がありすが月新
右音もたゞよひ月ねりしづや利云
とき何を好ゆうはぬ事かげんう月
人めくがなる耶どあすもかきゆるの
をやましにたれどうゆとおほ難いも
待つまことに立身ひづ

そそ行白手拭の頬ありうつむかひてう語
浮かびうきよあはよひどく承代様のあのかな
かやまとたの歌詞ひす・事と歌詞のやまとかやまと

のちやくはなすたわ難や判え職人のまゝ
まゝうれし鐵よりうるみやかひづ
いづやん様むべしがたくはるやまくづ
んぬくとくつめむよだすぞむわふひよ
せんとくよめむよだすぞむわふひよ
せん又船ふくよくへふく鐵よりうひよ
倍速車車くくいとよじよけくよ
又そそりひ手拭の頬ありかえをうどく
化者ノ鐵よりかなうば潤のやまとかやまと
りまきてとゆるひくらうと身をひすくと先

すよまんよとりて、いざりかみのり人よどもせが
あぐらをとす。神の風作もすくらよ後成
室家経火をよもがく。文治以降と
並んでくる。おゆきよし。おゆきよし。

終